

玉の緒 芝木好子

河出書房新社

玉の緒

© 1981

初版印刷 昭和五十六年五月十五日
初版発行 昭和五十六年五月二十五日

著 者 芝木好子

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 東京 四〇四―四一―二〇一（営業）
四〇四―四一―八六一（編集）

振替 東京 〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

紅皿	薄暮の庭	顔	空蟬	冬薔薇	玉の緒
179		109	75	41	5
	141				

装帧
原
万
千
子

玉 の 緒

玉の緒

もうそろそろ痛みのとれたところと思うが、病室を見舞ってもいいでしょうか、と若子は上原家へ電話を入れたあとで、築地川に近い病院へ出かけることにした。朝子の手術は無事に終わったが、回復までは時間がかかりそうだと聞いて、それも仕方がないと思った。手術の前の病床を見舞ったのは三週間も前のことだが、朝子はひどく震れていた。食べものを受けつけなくなっていて、手術をするより、このまま眠ったほうが良い、という様子であったから、若子は胸を衝かれた。そばに附添っていた美樹子
が、

「母は病気に負けて、意気地なくなっていますから、叱って下さいません。自分から

病氣と闘う氣力のない人を見ると、情けなくなつて」

と溜息をついた。大体胃潰瘍になつたのも神経性のもので、初期から医師に注意されてきたが、結果はこの通りだつた。自分で病氣を作つたも同然でしょう、と美樹子は娘の立場でつけつけといったものだった。

「朝子さんがそんなに神経質と思わなかつたわ。女学校のころはおっとりしていたのよ」

若子は病人の前でそう言つた。

「母が變つたのは、やはり兄があんな死に方をしてからです。朝元氣に家を出ていった二十歳の兄が、雪崩^{なだれ}に遭つて翌日は死んでいたので、それから無理もないけど、あれから六年経つても母の氣持の中から忘れてゆく部分はないようです。忘れようとする努力をしないのかしら。兄は母と氣性の合う快活でこまやかな質でしたけど、死んでまで母に取り憑くとは思わなかつたわ。母はあの当時、雪山と聞いても、遭難と聞いても、蒼くなつて耳を塞いでいましたのに、兄の山友達と雪山へ弔いに行ったと知

ったときは、呆氣にとられました。母のすることは、なにかもう分らなくて」

「きっと朝子さん自身も分らないのよ」

若子を取りなして、黙っている朝子を見た。

「あれから母は時折ふらっと家を出て、三、四日旅をして帰ってきますの。出かける度に、もう帰ってこない気がして、不安でした。父は仕事で海外へゆくこともありますし、私ひとりの留守番でしょう。父に訴えても、お母さんの好きなようにさせておけと言いますし、私の青春はめちゃくちやよ」

「いい結婚をなさったじゃないの」

「結婚して、ほっとしたんです。これで母のお守りから解放された。ところが今度は病氣ですの。娘泣かせもいいところだわ」

美樹子はずんとした調子で言い、それはそれで母の氣持を引立てようとしているともとれた。

「手術がすめば朝子さんもさっぱりして、元氣になってよ」

「六年の悪夢を払ってほしいわ。母がしゃんとしないと迷惑しますもの。父は父で、なにを言っても、ふん、と聞き流すだけですし」

「昨夜お電話したら、奥さんのこと心配していらしたわ」

「それは、心配ぐらいするでしょうよ」

言うだけ言うと言樹子は気がすんで、若子のいる間に用事を足しに病室を出ていった。若子はベッドの中の蒼ざめた朝子の顔へ目をやって苦笑した。

「なかなかの親思いね」

「娘も結婚すると怖いようよ。これが留守番やお使いの度にお駄賃をせびった子かと思ふことがあるわ」

朝子は真顔で言った。美樹子は子供の頃から確かりしていて、母が無駄な買物をすると袖を引っぱるし、レストランで母が注文を決めずに、娘と同じものになると、ひどくいやがった。今もやさしい看護は期待出来なかった。

「でも、面倒をみてくれるひとがあつて羨ましいわ。私をみてごらんさいよ」

若子はひとりで小さな工芸の店を切りまわしていた。早く結婚して子供を持った朝子と違って、長く美術雑誌社に勤めたあと、二十歳も年上の美術評論家で工芸店の主人でもある男と結婚して、七年あとには未亡人になっていた。ずいぶん遊び好きな夫を持って、どこで死なれるか知れたものではないと不安を抱き続けたが、夫は人並に妻に死水をとってもらって亡くなった。世間が若い妻を持ったから頓死したなどと陰口しても彼女は気にしなかった。世間が思うほど執拗に夫を悩ませたこともなかったし、彼は彼で適当に発散しているのを知っていた。死んだあとで隠し子が現れるかと懼れたが、それはなかった代り、昔の夫のことをわざわざ告げにくる女がいた。「どういう気でしょうね。一緒に油壺へ行ったとかのろけた女が、彼に贈ったデュポンのライターを返してほしいと言ひ出すのよ。そんなライターは見たこともないのに」

「一悶着あって？」

と朝子は小声で聞いた。

「いいえ。知らん顔をしただけ。私のように図太くならないと、病氣に克てないわよ」

四十七歳にしては艶やかな肌をした若子のきびきびした声にさそわれて、朝子は手術の前の不安をまぎらすことが出来たついでに、今のうちに若子へ頼みたいことがある、と言った。亡くなった息子の山仲間かまのリーダーだった男が、大学をやめて、祖父の残した窯かまでやきものをしていることは話したことがある。

「私が手術のあとで死んだら、やきものを見てやって下さらない」

「死ななかったら、どうするの」

若子は切り返すように訊ねた。手術の前に気負けしている病人に腹が立った。美樹子の感情がうつったのかもしれない。

「あなたが死んだら、それっきりにしたいわ。生きて元気になって頼まれたら、義理を立てて見てあげるくらい約束します」

若子の答えにひるんで、病人は目を伏せた。あとになって若子は言い過ぎたかと気

になつたし、死なれでもしたら嫌だ、と思ひもした。若い陶芸家のやきものに期待などしていなかった。今どき胃の手術で簡単に死ぬとは思わなかったが、不安を抱いていると、朝子はどうかやら無事に切りぬけたのであった。

築地川に近い病院あたりは大川から入りこんだ掘割の流れも堰止めて、殺風景な風情になっている。若子は橋を渡って病院を仰ぎながら、この六年間朝子はずっと病氣をしていたのだろうかと考えた。彼女の息子の雅弘は大学の山仲間と新雪の上越谷川岳の一の倉沢へゆき、遭難で死んだのだった。五人グループのうち雪崩の中心深く埋まって息絶えたのは雅弘一人であった。二日目に掘り出されて、山裾で待つ朝子の許へ変り果てて帰ってきた。おだやかだった彼女の生活の歯車が合わなくなったのはそれからだつた。ふらりと三、四日旅に出る。どこへ行くのかと聞くと、奈良をまわつてきたと答えたことがあつた。牡丹の盛りに会つたかとたずねると、知らないという。自分の歩いた道筋をうまく説明出来ないのだった。若子は子供を持たなくてよかった、と思つたほど傷ましい気がした。

病室の扉を押すと、病人は点滴の最中で、ベッドのそばに見舞客が掛けていた。若い男である。若子が入ってゆくと丁度点滴は終って、看護婦が輸血の道具をはずしてきた。朝子の頬へかすかに血がのぼって、手術の前より明るんでみえる。若い男は部屋の隅に退いて、若子へ会釈した。愛知の猿投山さなげからきた陶芸の杉元哲夫であった。若子はそれまで男の掛けていた椅子にかけた。

「あなたの処の小姑は、今日は来ていないようね」

「美樹子は早速手を抜きはじめたわ」

「手術のあとは痛かったでしょう」

「そばへ人が来ても痛むのよ。息をしても痛いくらい。誰にもこんな思いをさせたくないわ。胸は引裂かれてしまったし」

「でも死なくてよかった」

若子は抱えてきた花を附添婦に渡しながら、新しい壺に紫の都忘れがあふれるほど挿してあるのを目にした。青白磁の壺はほどのよい大きさに、花とよく合った。この